

日本農業気象学会における 「真木基金」を活用した次世代・研究交流活性化の取組み

松田 怜*・飯泉仁之直**・岩田拓記***・熊谷悦史**・平田竜一****・安武大輔*****

*東京大学 大学院農学生命科学研究科
**農業・食品産業技術総合研究機構 農業環境研究部門
***信州大学 理学部
****国立環境研究所 地球システム領域
*****九州大学 大学院農学研究院

Initiatives to promote the development of the next generation and research exchanges in SAMJ using the “Maki Fund”

*Ryo MATSUDA, **Toshichika IZUMI, ***Hiroki IWATA, **Etsushi KUMAGAI, ****Ryuichi HIRATA, *****Daisuke YASUTAKE
*Graduate School of Agricultural and Life Sciences, The University of Tokyo
**Institute for Agro-Environmental Sciences, NARO
***Faculty of Science, Shinshu University
****Earth System Division, National Institute for Environmental Studies
*****Faculty of Agriculture, Kyushu University

1. はじめに

2025年3月7日にリモートで開催された日本農業気象学会(以後、本学会)の総会において、真木太一名誉会員より意見があり、次世代活性化基金について触れられた。次世代活性化基金は、真木名誉会員から本学会への寄付により設立されたものであり、本学会の活動のうち次世代活性化を目的としたものの多くは同基金を活用している。真木名誉会員には、本学会の創立75周年記念式典において、北野雅治会長(当時)より感謝状が贈られた。しかし、寄付から時間が経過し、近年、この経緯が必ずしも本学会員に広く認知されていない可能性について、理事会でも指摘があった。そこで今回、担当理事として、これまでに次世代活性化基金を活用した活動を行ってきた立場から、基金を活用して得られた成果についてあらためて取りまとめ、報告する。なお本稿では、真木名誉会員への謝意を表して、次世代活性化基金を、その通称として「真木基金」と称することとする。

表1は真木名誉会員からの寄付を活用した成果をまとめたものである。2018年度総会資料(日本農業気象学会, 2018)にあるように、真木名誉会員の寄付100万円のうち、30万円は本学会の75周年記念大会組織委員会(2018年全国大会およびInternational Symposium on Agricultural Meteorology 2018 (ISAM2018), 九州大学伊都キャンパスで2018年3月13~17日に開催)が受け入れた。残りの70万円で「真木基金」が新設された。「真木基金」は次世代活性化につながる

企画の実施を目的とし、実施に際しては若手活性化担当理事が計画を会長に提案し、理事会の承認を得るものとされた。若手活性化担当理事の名称は、その後、次世代活性化理事、研究交流活性化理事に変更されたものの、本稿の著者である歴代の担当理事を中心に「真木基金」を活用した企画を実施してきた。これまでの主な企画には、2回のサマースクール、75周年記念出版、高校生ポスター発表などが含まれる(表1)。以下、それぞれの活動について短く報告する。

2. 次世代・研究交流活性化の取組み

2.1 75周年記念大会

本学会の学術の底流を改めて会員で共有し、その重要性を社会や関連研究者・技術者・学生に認知してもらうことを意図して開催した本記念大会では、とくに次世代の若手会員が、次の創立100周年に向けて「農業気象学の未来可能性」を確認・共有することを重要な目標として掲げていた。そこで、17名の若手研究者から構成される若手企画委員会が発足され、未来可能性となる魅力ある企画案について議論が行われた。その結果、海外の著名な研究者を招聘してシンポジウムで基調講演を行ってもらうこと、および海外の若手研究者を招聘してオーガナイズドセッションで研究交流を実施することの2つの企画が決定された。これらの海外からの招聘において、真木名誉会員からの寄付が活用された。

前者の企画においては、企画委員から最も要望が多かった Prof. Carl Bernacchi (University of Illinois, USA) を招聘した。ISAM シンポジウム「Perspectives of Photosynthesis and Crop Production」において、「Rising CO₂, Warming Temperature

表 1. 真木名誉会員からの寄付を活用した企画一覧

会計年度	使用主体	目的	金額 (万円)
2018	75 周年 記念大会 組織委員会	若手企画実施費	30
2018	若手活性化 担当理事	サマースクール 2018 開催補助費	21.5
2019	次世代活性化 担当理事	75 周年記念 出版費	20.5
2019	次世代活性化 担当理事	サマースクール 2019 開催補助費	14.9
2020	次世代活性化 担当理事	アンケート実施 アルバイト費	*
2025	研究交流 活性化担当 理事	高校生ポスター 発表補助費	2.6

* 2020 年度に 8 万円が予算計上されたが、新型コロナウイルス感染症による行動制限が実施された時期にあたり、支出実績は 0 円となった。なお、アンケート結果は松田ら (2020) によって報告されている。

and Heat Wave Impacts on Photosynthesis, Growth and Yield of Maize and Soybean」という、農業気象学の多くのトピックに普遍的に関わる最先端の話題について、基調講演として講演してもらった。この企画の後、本学会の若手研究者や学生による Prof. Bernacchi の研究室への留学、研究チーム活動への参画実績につながったことをふまえると、本企画が本学会分野の未来可能性に大いに貢献したといえる。

後者の企画においては、若手の会と ISAM2018 の共同開催のオーガナイズドセッション「創立 100 周年に向けた若手研究者の国際連携 (International Partnerships for Young Scientists Toward the 100th Annual Meeting)」(オーガナイザー: 若手の会代表 臼井靖浩) において、Dr. Chen Po-An 氏 (Associate Research Fellow, Agricultural Technology Research Institute, Taiwan) を招聘し、「Establishing and Applying Temperature Model of litchi Flowering」というテーマで講演してもらうとともに、本学会の若手研究者・学生らと海外交流の観点から議論が展開された。

どちらの企画も、本学会の未来可能性を担う若手を意識したものであり、その実施を通じて若手会員が国際的な視野と研究交流の重要性、楽しさを肌で感じる貴重な機会となったことは間違いない。真木名誉会員からの寄付が、こうした未来志向の取組みを具体化させる大きな力となったことに、あらためて深く感謝の意を表したい。

2.2 サマースクール

2018 年夏に、農業気象サマースクール 2018 を開催した。その経緯、内容、実施後のまとめ、今後の課題等について、すでに本誌にて報告済みである (平田ら, 2019)。詳細はそちらを参照してもらうこととして、本稿では概要を掻い摘んで説明する。

本サマースクールは、北野会長 (当時) ならびに寄付者である真木名誉会員の、とくに若手会員の活動の活発化に役に立ててほしいとの意向を受けて、当時の若手活性化担当理事 (平田, 飯泉, 松田) を中心に企画されたものである。この 3 名に加えて、藤内直道, 地子智浩, 伊川浩樹, 臼井靖浩の各会員で実行委員会を組織した。サマースクールのテーマを『超』スマート農業への農業気象学の挑戦とし、2018 年 8 月 30, 31 日に筑波研修センター (茨城県つくば市) にて実施した。講師 4 名, スタッフ 6 名, 特別参加の北野会長を含め、計 37 名が参加し、その大半は学生, 若手研究者であった。1 日目には自己紹介, 講師による講演, 参加者によるディスカッション, および懇親会を、2 日目には関連施設の見学を実施した。開催後に行ったアンケート結果から、当初の目的である「主に農業気象学分野の学生を対象に、特定のテーマ (今回はスマート農業) についての議論を通じて、他大学の学生や社会人との交流を図る機会を設ける」という目的は、十分に達成されたといえる。

2019 年に開催したサマースクールは、陸域フラックス合同研究会との共催として、信州大学松本キャンパスにて開催された。2018 年ほどの規模のサマースクールを開催するのは難しかったため、本学会への参加者が多い研究会を支援し、全国大会への参加を促し、学生や若手研究者の本学会での活動の活性化を狙った。陸域フラックス合同研究会は千葉大学, 大阪公立大学, 信州大学のフラックス研究を実施している研究室を中心に、その所属学生による研究発表を行い、学生の交流を促進するために開催しているものである。サマースクールとの共催により北海道大学, 東京大学, 大阪大学からも学生が参加し、計 16 件の研究発表が行われた。さらに、サマースクール企画として Python を用いたフラックスデータ解析演習も行われた。

2.3 75 周年記念出版

「真木基金」を活用した成果の 1 つに、本学会 75 周年記念出版としてシュプリンガー・ネイチャーから 2019 年に出版された「Adaptation to Climate Change in Agriculture — Research and Practices」がある。本書の出版は、本学会が 2018 年に創立 75 周年を迎えるにあたり、北野会長 (当時) から次世代活性化担当理事に任命された飯泉, 平田, 松田により提案された。飯泉ら (2019) に報告があるように、本学会員には、執筆者としてだけでなく、企画, 出版社の紹介, 査読, 宣伝など、多岐に渡って協力してもらった。本書は、日本, 中国, 韓国, フィリピン, イタリア, 米国の研究・教育機関に所属する著者 26 名が執筆した 14 章 (序文と前書きは除く) からなる。本書は、2022 年に公表された、気候変動に関する政府間パネル (IPCC) の第 2 作業部会第 6 次評価報告書の第 5 章と第 10 章でそれぞれ引用されており、気候変動に関する科学的知見の取りまとめに対する、本学会からの重要な貢献になった。

2.4 全国大会における高校生ポスター発表

本学会は 2024 年全国大会より、大会開催地の地元の高校生によるポスター発表セッションおよび学会員ポスターの

見学会を実施している(岩田ら, 2024)。熊本市において開催された2025年全国大会においても両イベントを実施し、6校から計28名の高校生の参加があった。参加高校生からは「専門家からの意見を今後の研究に活かしていきたい」、「視野を広げるいい機会となった」などの好評が寄せられた。また、2025年全国大会では、優秀な高校生ポスター発表に対して優秀発表賞を授与して表彰した。

2.5 その他

「真木基金」を直接的に活用したものではないが、上述の活動の他に、全国大会非公式懇親会(2022年)および80周年記念オーガナイズドセッション(2023年)を、次世代活性化・研究交流活性化の一環として実施した。前者は、コロナ禍でオンライン開催となった2022年全国大会に合わせて、全国大会の重要な機能の1つである参加者間の交流の場を設けることを目的に行ったものである。「農業気象学会のこれからを考える」と題したパネルディスカッションと、Zoomのブレイクアウトルーム機能を利用して、従来の全国大会懇親会に見立てたオンライン懇親会を開催した。後者は、本学会創立80周年を記念して、2023年全国大会において企画されたものである。こちらについては、本誌掲載の詳細な報告(熊谷ら, 2023)がある。

3. おわりに

本学会における、若手活性化担当理事、次世代活性化理事、研究交流活性化理事のこれまでの取組みを簡潔に紹介した。また、75周年記念大会における若手企画委員会による海外研究者の招聘についても記した。2018年から始まり、2025年現在まで継続されてきた農業気象学会におけるこれらの活動は、「真木基金」をきっかけに始まったと言える。これまでにない若手・中堅研究者の繋がりができたのは、紛れもなく「真木基金」のおかげである。

一般に、寄付とは善意によって無償でなされるものと解されている。一方、その寄付に対して、寄付を受けた側が自発的に謝意を表することは、何ら妨げられるものではない。その謝意を表する手段として、まず本学会の理念に合致する用途において寄付金を有効に活用するとともに、総会等の場でその執行の透明性を担保することは当然のことである。また、本学会が出版する公式の学会誌において関連の取組みを文章として記述し、学会内外に公表するとともに、後世のためにもその内容を記録しておくことは、学術に携わる者としてはできうる限りの謝意の表し方であろうと考える。この機会に、真木太一名誉会員にあらためて最大限の感謝を示したい。これまでの取組みによって活性化された次世代が、本学会でさらに活躍する未来が来るのであれば、取組みに関わった者としては望外の喜びである。

最後に、これまでの7年間の活動を振り返り、今後検討すべき事項についても触れたい。次世代活性化に限らないが、企画の実行のためには時間や労力を要するものの、担当理事であっても、それらの確保が難しくなりつつある。真木名誉会員から寄付があった2018年に比べると、一部の

大学や研究所では、本務での責任が増す一方、学会業務に時間を割くことが以前ほどには肯定的に評価されなくなってきたことも一因である。言い換えると、仮に次世代活性化のための予算があっても、執行する体力・体質が、本学会内に充分にあるとは必ずしも言えない状況になりつつある。学会員減少を想定した学会運営のスリム化とともに、今後、本学会への寄付が再びあった場合の学会側の受入体制(例えば、原則として用途を限定しない形で寄付を受け入れる、など)についても、検討が進むことを期待する。

引用文献

- 平田竜一・飯泉仁之直・松田 怜・藤内直道・地子智浩・伊川浩樹, 2019: 農業気象サマースクール2018『超』スマート農業への農業気象学の挑戦 実施報告. 生物と気象 **19**, 15–22.
- Iizumi T, Hirata R, Matsuda R, 2019: *Adaptation to Climate Change in Agriculture — Research and Practices*. Springer, Singapore, 229 pp.
- 飯泉仁之直・平田竜一・松田 怜, 2019: 日本農業気象学会75周年記念出版「Adaptation to Climate Change in Agriculture — Research and Practices」の紹介. 生物と気象 **19**, 87–92.
- 岩田拓記・熊谷悦史・小森大輔・大場 真, 2024: 研究人材確保のための全国大会における高校生参加イベントの重要性. 生物と気象 **24**, 61–63.
- 熊谷悦史・野村浩一・植山雅仁・丸山篤志・岩田拓記・松田 怜, 2023: 日本農業気象学会80周年記念セッション報告「農業気象学における観測・計測およびモデル研究: 現在位置と将来展望」. 生物と気象 **23**, 66–70.
- 松田 怜・平田竜一・安武大輔, 2020: 「次世代の学会のあり方」に関する若手・中堅会員の意見. 生物と気象 **20**, 99–104.
- 日本農業気象学会, 日本農業気象学会2018年度 総会資料. <https://agmet.jp/wp-content/uploads/sokai18ver2.pdf> (アクセス日: 2025/6/5) .